

子ども一人一人が自己表現し，互いに尊重し合う学級づくりについて
～生徒指導の三機能に基づく取組を通して～

志布志市立安楽小学校 教諭 大野 舞

目 次

1	研究主題	1
2	研究主題設定の理由	1
3	研究の仮説	1
4	研究の内容と方法	1
5	研究の実際	2
	(1) 生徒指導の目的等についての解釈	
	(2) 児童の実態の把握・考察	
	(3) 生徒指導の三機能に基づく具体的な取組	
6	研究の成果と課題	9
7	おわりに	9

1 研究主題

子ども一人一人が自己表現し、互いに尊重し合う学級づくりについて

～生徒指導の三機能に基づく取組を通して～

2 研究主題設定の理由

今年度は4年生の担任となり、中学年という発達段階の特性を踏まえての学級経営がスタートした。9～10歳頃の子どもの人間関係は、それまでの「親子関係中心」から「友人関係中心」へと変化する。また、この頃から劣等感や羞恥心などを強く意識する子もいて、場合によっては否定的な自己評価につながってしまう。本学級の子どもたちもまさに上記のような特性が現れてきており、友人関係で悩みをもったり、人前で自分の本来の姿を出せなかったりしていた。そのような発達段階においても大事に育てていきたいと感じたのが「自己実現に向けての意欲」である。それぞれが自分のことを大切に思い、自分の将来に夢と希望を抱いて一步一步前に進む気持ちを育んでほしい。集団生活の中で、子どもたちがそれぞれにどのように関わり合い、どのように自分の存在を見だし、自分のことを大事に思えるか。そのためには、子どもたちが自分をよりよく表現することの重要性や、自分も相手も大切な存在であることを実感させ、互いを尊重していかうとする気持ちを育てていくことが大切だと考えた。

「生徒指導は、一人一人の児童生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現できるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の児童生徒の**自己指導力の育成**を目指すものです。そのために、日々の教育活動においては、①児童生徒に**自己存在感**を与えること、②**共感的な人間関係**を育成すること、③**自己決定**の場を与え自己の可能性の開発を援助することの3点に留意することが求められています。」(生徒指導提要 平成22年3月 文部科学省)とある。そこで、生徒指導の面から「自己実現」に向けてアプローチすることを、今年度の自身の学級経営のテーマに定め、上記の「生徒指導の三機能」を具現化するための取組について研究、実践していきたいと考え、本主題を設定した。

3 研究の仮説(「生徒指導の三機能」に基づく取組より)

- (1) 学校生活の中で学級や自己の生活をよりよくするための「**自己決定**」の場やその機会を設けることで、子どもは自己実現の喜びを味わうことができるだろう。
- (2) 互いに協力し合って取り組んだり、互いのよさを認め合って取り組んだりすることで、子ども同士の「**共感的な人間関係**」を育てることができるだろう。
- (3) 子ども一人一人が自ら役割を自覚して互いに協力し合ったり、自発的な思いや願いを大切にしてい取り組んだりすることで、「**自己存在感**」を感じることもできるだろう。

4 研究の内容と方法

- (1) 生徒指導の目的等について解釈し、自己実現に向けての方策を探る。
- (2) 児童の実態を把握・考察し、課題を整理して具体的な取組を計画する。
- (3) 生徒指導の三機能を生かす具体的な取組を実践する。

5 研究の実際

(1) 生徒指導の目的等についての解釈

(やまぐち総合教育支援サイト「よりよい生徒指導に向けて」平成23年3月改訂)

ア 生徒指導の目的とは

生徒指導の目的は、児童生徒一人ひとりの夢の実現に向け、児童生徒一人ひとりが自分自身をありのままに認め、自己理解を深めることを基盤とし、他者とのかかわりの中で、自ら選択・判断・実行し、その言動に責任をもつことができる力(自己指導能力)を育成することである。

イ 自己指導能力とは

自己指導能力とは、自己をありのままに認めること(自己受容)、自己に対する洞察を深めること(自己理解)、これらを基盤に目標を確立し明確化していくこと、そして目標達成のため、他者とのかかわりの中で、自発的・自立的に自らの行動を判断し実行することなどである。

また、自己指導能力の育成に当たっては、他人のためにも、自分のためにもなるという行動を児童生徒自らが考え、それらの行動に対してきちんと責任をとるという経験を積み重ねる必要がある。

つまり、自己指導能力とは、「児童生徒が、日常生活のそれぞれの場で、他者とのかかわりの中で、どのような選択が適切であるか、自分で判断・実行し、その言動に責任をもつことができる力」であり、「生きる力」の土台となる力ともいえる。

ウ 自己指導能力の育成に向けての三機能とは

自己存在感を与えること

児童一人ひとりの存在を大切にす。人間は、他者とかかわりの中で自己の存在感を見い出せるとき、生き生きと活動できるのであり、児童が自己存在感を得ることにより自己実現を図ることができる。よって、指導者は、児童一人ひとりの独自性や個性を大切にしながら、様々な学校生活の場でそれぞれが自己存在感をもてるように指導を進めることが重要である。

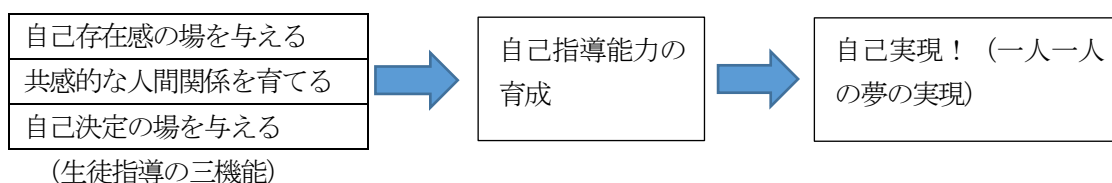
共感的人間関係を育成すること

相互に人間として無条件に尊重し合う関係であり、ありのままに自分を語り、理解し合う人間関係。このような中にあることで、児童生徒自身の自己受容・自己理解は高まっていく。

自己決定の場を与え、自己の可能性の開発を支援すること

子どもたちが自らの行動を決断し、実行し、責任をもつという経験を通して、自己指導能力の育成が図られる。学校は、子どもたちが自らの可能性を発見し、伸長できるように、適切な経験の場や活動の場を設け、自己決定の場をできるだけ多く用意し、他者とのかかわりの中で子どもたちが判断力を高め、責任のある行動をとれるように支援することが重要である。

以上のことを整理すると、子どもたちの自己実現に向けた取組として以下のように図式化できる。



(2) 児童の実態の把握・考察

自己表現に関するアンケートをとった。結果は以下のとおりである。

1 あなたは、人の前で意見を言うのが好きですか？理由も教えてください。

好き：12人

好きではない：19人

(理由)

- ・ 「あ〜。」と納得してもらえるのがうれしいから。
- ・ 自分の意見を聞いてもらえるから。
- ・ 発表が好きだから。
- ・ 自分の考えを知ってもらえるから。
- ・ すっきりするから。

- ・ 注目されるのは嫌だから。
- ・ はずかしいから。
- ・ 自分の言っていることが伝わらないかもしれないから。
- ・ 緊張するから。
- ・ 納得してもらえないかもしれないから。
- ・ 自分の意見が間違っているかもしれないから。
- ・ まねをしたと思われるのが嫌だから。

2 あなたは、友達と違う考えでも発表することができますか。

できる：13人

あまりできない：18人

- ・ 自分の意見を出すのは大事だから。
- ・ 一人一人の意見は大事だから。
- ・ 自分の意見を分かってほしいから。
- ・ 友達の意見と違うからこそ、自分の考えを知ってもらいたいから。
- ・ いろいろな考えがあることを知ってもらうことがいいと思うから。

- ・ もし自分だけが違うと思うとなかなか言えないから。
- ・ 友達の反応が気になるから。
- ・ 同じ考えがいいと思うから。
- ・ はずかしいから。

3 「1分間スピーチ」は好きですか？

好き：18人

あまり好きではない：13人

- ・ 自分のことを知ってもらえるから。
- ・ みんなの話を聞くのが楽しいから。
- ・ 準備をして発表するのは楽しいから。

- ・ テーマを考えるのが苦手だから。
- ・ 短いと恥ずかしいから。
- ・ 緊張するから。
- ・ 大きな声を出さないといけないから。
- ・ 文を考えるのが苦手だから。
- ・ 間違えたときに笑われると思うから。

本学級は、31人の4年生学級である。1年生のときより単式の学級で、転出入が数人あるにしても、ほぼ毎年同じ集団での学校生活を送っている。そうすると、子どもたちは互いをよく知ることができる反面、それぞれの個性が確立したものとして捉え、学級で自分が見せる姿をそれ以上のもので見せようとしないう風潮があるようである。自己表現が得意な子ども、

得意でない子どもがいるのは当然であるが、自分の思いや考えを伝えることに積極的になることを諦めてしまうのは残念なことである。

アンケートの結果から、人の前で意見を言うことが好きではないと答えたのが 19 人と全体の約 3 分の 2 であり、その理由は、「恥ずかしいから」「納得してもらえないかもしれないから」等、自己表現に自信をもてていないことが分かる。人と違う意見でも発表することができるかについては、できないと答えたのが同様に全体の約 3 分の 2 である。これも理由は「自分だけが違うと嫌だから」「友達の反応が気になるから」等、自分の考えに対して自信をもつことができないようである。しかしながら、1 分間スピーチのような、自由なテーマで自分のことを自由に発言する場合は、全体の約 3 分の 2 の子どもたちが「好き」と答えている。自分のことを友達に知ってもらいたいという思いや願いは多くの子どもたちが持っていることも分かる。

子どもたちの思いをまとめると、自己表現に際して「伝わってほしい」「納得してもらいたい」「自分のことを知ってもらいたい」といった願いがあることも分かる。

よりよい人間関係を築くためには、自分のことを知ってもらい、また相手のことも知り、互いを大切な存在として尊重し合う関係を作っていくことが大切である。そのためには自分のことを表現することの重要性を子ども自身が実感し、自分発信することに積極的になる手立てを講じる必要があると考える。ありのままの自分を示し、また友達のありのままの姿を受け入れ、認め合い、そこから自分も相手も大切にできる人間関係作りにつながるだろう。安心して自分を表現できる環境作りが本学級の課題であると考え、「自己存在感」「共感的人間関係」「自己決定」の 3 点をキーワードにした学級作りを目指すことにした。

(3) 生徒指導の三機能に基づく具体的な取組

仮説 1) 学校生活の中で学級や自己の生活をよりよくするための「自己決定」の場やその機会を設けることで、子どもは自己実現の喜びを味わうことができるだろう。

(視点) 自分の思いを形にし、学級の中での所属感を高めるための自治活動を充実させる。

ア 「こんな学級にしたい!」 についての話し合い活動

1 学期の初めに、4 年生として 1 年間を過ごすのにどのような学級にしていきたいかについての話し合いを行った。それぞれが思いを出し合い、それらをまとめたものを掲示した。

自分の出した意見が掲示されることで、「自分の意見も学級にとって大事な意見とされている。」と喜びを感じてほしいと考えた。

(子どもたちが出した言葉の一部)

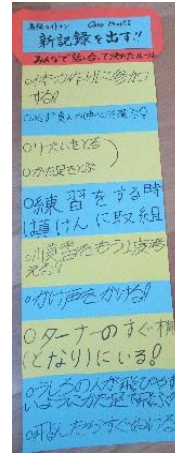
みんなで支え合って
けんかしても仲直り
みんながきらきら輝く
いじめがないように
何でもチャレンジ
笑い声がいっぱい
差別を決してしない



【写真 1 『One Heart』～こんな学級に～の掲示】

イ みんなの願い「長縄新記録達成」に向けた話し合い活動

前年度より長縄エイトマン（かごしまチャレンジ）に意欲的な学級で、今年度も新記録を出し続けたいという願いをもっていた。担任主導で進めるのではなく、子どもたちが自ら進んで新記録に向けて動き、自分たちの力で目標を達成できたという思いをもってほしいと考え、話し合いを行った。体育係が中心となり、練習計画や、長縄を跳ぶポイントなどをみんなで確認する場となった。



目標達成シート。野球の大谷翔平選手の
実践をまねて。「新記録」を出すための策を
まとめ、教室に掲示。（体育係が作成）

ウ 個々の目標設定、掲示（運動会や持久走大会）

運動会でのそれぞれの目標、持久走大会での目標タイム等をカードに書き、掲示（写真右）。特に、持久走の目標カードについては、練習でのタイムや試走でのタイムも書き込むことで、自分だけでなく友達の努力の成果も見ることができ、お互いに励まし合ったり、刺激を受けたりという場になった。



【写真2 個々の目標の掲示】

エ 学級のための自発的な呼びかけ活動

係活動の枠にはまるのではなく、気付いたり、子ども自身が課題と感じたことに関して、自発的にポスターを作ったり、呼びかけたりする活動の推進を図った。

- ・ 手洗いやうがいの呼びかけポスター
- ・ 給食準備中の待つ態度や、黙食についてのポスター
- ・ 水道場をきれいに保つための呼びかけポスター等

これらのポスターはいずれも自発的に作成された。つまり、学校生活の中で「気を付けたい」「みんなで守っていきたい」と感じたことを、自分だけでなく全体に呼びかけて、みんなでよりよい生活をしていきたいという願いの表れである。自分たちの学級は、自分たちの手で作っていけるものだという認識を深めることにつながった。



【手洗い喚起のポスター】



【水道場のポスター】

仮説2) 互いに協力し合って取り組んだり、互いのよさを認め合って取り組んだりすることで、子ども同士の「共感的な人間関係」を育てることができるだろう。

(視点) 互いに協力することの喜びや達成感を味わう活動や、自分のよさ、友達のよさを共感できる活動を充実させる。

ア 「ありのまま」を認め合い、友達の喜びを共有する活動

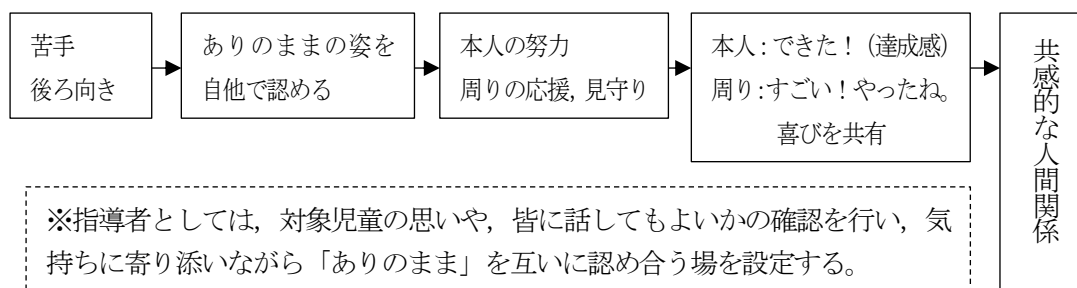
A児は、運動に関して苦手意識をもっており、挑戦する意欲をもつことが難しい場面が多い。2学期の高跳び運動に際しては、ゴムを使つての低い位置でもなかなかジャンプが難し

い状態であった。バーを使ったときは助走の段階で足が止まってしまうほど、恐怖心をもっていた。そこで、最終目標を、「低くても、バーを跳び越えよう。」と設定し、練習では見学の児童の補助をもらいながら、ゴム跳びや、壁のラインを使っての足上げの練習に励んだ。その様子は、周りの児童も見ていた。

いよいよ最終日、それぞれが練習の成果を見せ合う場で、他の児童がバーを次々と跳び越えていった。最後がA児で、バーを太もの高さほどに設定した。緊張の表情で助走を始めたA児は足を振り上げ、見事跳び越えることができた。その瞬間、皆が歓声をあげ、拍手喝采となった。「すごい。やったね。〇〇ちゃん。」中には涙を流す児童もおり、友達の努力を皆で讃えた瞬間であった。A児は達成感を味わい、A児のうれしさをみんなで共感する貴重な場面となった。

A児の変容…他にも長縄や持久走など、A児は苦手意識をもっていた。初めのうちは、練習に消極的であった。また、周りの児童もA児のミスに文句を言ったり、指摘をしたりすることがあり、ますますA児は後ろ向きな態度になった。このようなときに、あえてA児の思いを全体に話し、A児の苦しさや悩みを知ってもらうようにした。得意としている児童の、「自分と同じようにできるはずだ。」「できないのは、その人のがんばりが足りないからだ。」という意識を改めさせるようにした。「みんなちがってみんないい」の精神のもと、個別練習など仲間の励ましやアドバイスをもらいながら、前向きに取り組むようになった。

他の児童についても同じように、まずは「ありのままの姿」を自分も他者も認め、そこからのがんばりや取り組む姿を見守り、本人なりの成長をみんなで共有する、という流れで様々な活動を進めてきた。次第に、みんな一人一人が大切な存在であるという意識、励ましの声や、静かに見守るという雰囲気が高まってきた。




イ 「友達のよいところさがし」ビンゴゲームの実践 (道徳)

<活動のねらい>

自分や相手のよいところを素直に表現することをためらう児童も少なくない。しかし、自分のよいところを人に言ってもらえると自己承認欲求が満たされ、自分に自信がもてるようになる。また、友達のよいところを積極的に探す活動によって、友達のよさに改めて気付くことができる。

<活動の実際>

ビンゴの進め方と、実際の児童の様子は以下のとおりである。道徳の教科書で提示してある進め方のとおりにはいかず、途中でルールを変更して活動を進めた。

活 動 の 流 れ	活動の実際と児童の様子
<p>1 自分のよいと思うところを表の8つのマスに書き込む。</p> <p>2 ビンゴスタート。教室内を自由に動き、相手を見つけてじゃんけんをする。</p> <p>3 じゃんけんで負けた人は、相手のよいところを1つ言う。</p> <p>4 勝った人は、言われたことがあったら、そのマスに○をつける。</p> <p>5 これをくり返し、列がそろえばビンゴ。時間がきたら終わる。</p>	<p>このルールを確認した直後から「いいところ、そんなに書けないよ。」「一つしか思い浮かばない。」といった声が多数あがった。照れや恥ずかしさがあって積極的に書こうとしない児童もいるとは思われるが、自分のよさをなかなか挙げられない児童も多い。そこで、ルールを変更。書ける分だけ書き、あとは友達から言われたことをマスに追加していくという形にした。</p>  <p>なかなかマスを埋められない子も多い。「自分のよさ」自体を考えたことがないということか。</p> <p>初めのうちは戸惑う様子の児童も見られたが、やりとりを進めていくうちに笑顔が見られるようになってきた。</p> <p>自分では感じていない部分を、友達からはよさと思われていることに驚いたり、喜んだりしていた。</p>

<児童の日記より（振り返り）>

- ・ わたしは、友達から「何でも一生懸命なところがすごいね。」と言われました。とてもうれしかったです。わたしはいつも一生懸命することを心掛けているので、これからもそうしたいと思いました。
- ・ ○○さんが「体が柔らかくてうらやましいな。」と言ってくれました。ぼくは今までそんなふうに思っていなかったので、ぼくにとっても発見でした。ビンゴは楽しかったです。

以上のように、この活動は、互いのよさを知ることの楽しさや、これまで意識していなかった自分のよさの新発見等につながる機会となった。

仮説3) 子ども一人一人が自ら役割を自覚して互いに協力し合ったり、自発的な思いや願いを大切にしていけることで、「自己存在感」を感じることができるだろう。

(視点) 子どもたちの思いや考え、発想等を大切に受け取り、それらを共有化する時間や空間を充実させる。(環境作り)

ア 折り紙作品展示コーナー（折り紙名人にスポットライトが）

今年度もコロナ禍での学校生活となり、休み時間は静かに読書をしたり絵を描いたり、折り紙をしたりといった過ごし方が中心であった。そのような中、折り紙が得意な児童が次々と作品を作り、「これ教室に飾っていいですか。」と相談に来た。そこで作品コーナーを設置し、展示した。興味を示す児童も多く、折り紙ブームが生まれた。作品を見て称賛したり、「わたしも作りたい。」と教え合ったりする中で、子どもたちはコミュニケーションをとり、互いをよく知ることができたように思う。昼休みには低学年児童を教室に招いて「折り紙教

室」を開くといった活動も行っていた。自分たちで日時を決め、低学年の担任のもとへ招待状を送り、数日前から係分担等の準備をする。当日は机の配置を変えたり、歓迎の設営をしたりして低学年児童を招き入れる。喜んでもらいたいという一心で知恵を出し合っている。これら一連の活動を見ていると、プランニングの力もついてきているなど感じる。一部の児童による活動ではあるが、周りの児童もよい刺激を受けているのではないだろうか。得意を生かすことは自己存在感を高めるということを示している。



【 折り紙作品コーナー 】



【 はじめの言葉 】

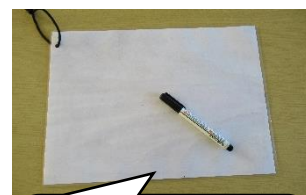
児童 K は自己肯定感が低く、「どうせわたしは…」という発言が多い。しかし、折り紙が得意で、作った作品を友達からほめられることが多い。折り紙教室を開くメンバーにも加わり、非常に生き生きと活動する姿が見られた。



イ ロイロノート、my ホワイトボードの活用

アンケートの結果からも、児童は自分の思いや考えを知ってほしい、また友達の思いを知るの楽しいという思いをもっている。そこで、my ボードの活用を積極的に進めることにした。

ロイロノートでのテキストや、個人用ホワイトボードである。それぞれの考えを一斉に貼り出しみんなで見合ったり、クイズ形式にしたりと活用の幅は広い。実際の活用場面は以下のとおり。



一人一枚、ペンとセットで。机横に掛けているのですぐに使える。活用度が高い。

<ホワイトボード>

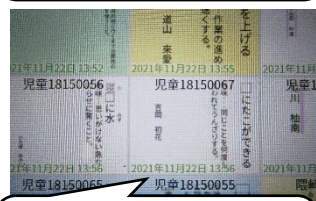
- ・ 漢字の広場 (国語) …お題に合わせた文作りをする。ボードに書いたものを黒板に貼り、みんなで読み合う。その場で書き込みがしやすい。主・述の組み立て等も確認ができる。
- ・ 算数の問題作り…単元の終末段階で、自分が作った問題にみんなが挑戦する。
- ・ 復習タイム (各教科) …わずかな時間を使って復習係が問題を出す。他の児童は答えをボードに書き、一斉に見せる。まるでクイズ番組のパネラーのようで楽しい。

<ロイロノートのテキスト>

- ・ 慣用句クイズ (国語) …慣用句について学習し、終末時にクイズを作成。一斉配信画面で全員のクイズに挑戦した。
- ・ リーフレット作り (国語) …それぞれの工夫点やレイアウトの仕方などを作成途中でも画面に提示できるため、適宜みんなで確認しながら作業を進めることができた。



算数の問題作り。自作問題にみんなで挑んでくれる。



慣用句クイズ作り。文字入力やレイアウトも工夫。

これら、自分の考えや思いを提示する活動は、多くの児童が積極的に取り組んでいた。まず何より、自分が発信する場面においては、自分の表現の最高の形を見せたいという欲求から、細心の注意を払っている。誤字・脱字はないか、文の組み立てはおかしくないか、字の大きさはみんなに読みやすいものになっているか等である。だからこそ、提示の瞬間の表情は誇らしげだ。

また、友達の表現を見る際は、自分のものと比べたり、よさを見つけたり、「次は自分もあんなふうにしたい。」と刺激を受けたりしている。

6 研究の成果と課題

- ありのままの姿を見せる、それを周りの者が受け入れるという環境作りを進めた結果、互いに温かい言葉を発したり、応援をしたり、共に喜んだりという共感的な人間関係が深まってきた。また、苦手を隠すのではなく、周りのサポートを得ながら前向きに取り組むことへの勇気をもつ児童が増えてきた。
- 自分の意志を目に見える形にしたものが学級のためになることを実感することで、学級づくりの役に立っているという気持ちが生まれ、所属感の高まりにつながった。
- それぞれの自己表現の場を丁寧に扱うことで、自分発信に自信を持ち、より創意工夫をする児童が見られるようになってきた。
- 「学校楽しいと」を1学期と2学期の計2回行い、比較できるよう個人票を用意したにもかかわらず、それらを本研究で活用することができなかった。データに基づいた分析・考察から課題を見付け、それらに対する取組を考えていくことで、よりよい学級づくりができると感じた。
- まだまだ自分に自信をもてない児童も多い。自己表現を進める一方で、そればかりをよしとするのではなく、個々の特性をその子に応じた形で生かし自己肯定感の高まりにつながる関わり方を考えていく必要がある。

7 おわりに

本学級では1月20日に半成人式を行う予定である。この式のためにずいぶん前から計画を立て、準備を進めてきた。子どもたちが主体となって作り上げる式を目標にしている。係分担においても、「自分の得意を生かしたい。」という思いを反映できるように話し合いを行った。また掲示物作成においても、「自分史」や「ドリームマップ」など、自分という存在をかけがえのない大切なものと思えるような内容にし、子どもたちは意欲的に作業を進めている。当日多くの方々から労いの言葉をもらうことで、式に向けてのこれまでの自分の努力や苦労の経験は、自己肯定感を高める宝の経験に変わるだろう。それだけでなく、友達の作品を見たり、出し物を成功させるために力を合わせたりというのは、互いに尊重し合う関係作りをさらに深めてくれるだろう。

人は人との関わり合いの中で、自分を大事な存在ととらえることができるし、互いに尊重し合う関係作りも生み出せる。親子はもちろんであるが、学級集団、学校という集団、そして教師と子どもの向き合いが、子どもの心を作っていく。今、目の前にいる、そして未来を担う子どもたちが、自分のことを大切にしながら、また周りのものも大切にしながら自己実現を図ってほしい。そのためにも、私は教師として、子どもたちがその子なりに少しずつでも自信を高めていけるような関わり合いを目指していきたい。